

尊厳の巻

今回はちょっと小難しい話になりそうです。

人間の尊厳で、どんなことだとおもいますか？

ひと頃から「尊厳死」という言葉が流行りだしました。

だいが昔のことになりますが、学生時代、医学部の同級生たち数名と一緒に、尊厳死に関する学生シンポジウムみたいなものを企画したことを思い出します。法学部の先生などにもご協力いただいたにもかかわらず、しょせんは 20 代前半の学生ですから当事者意識は薄く、頭で考えた(屁)理屈をこねまわしていただけだったかもしれません。ただ、周りのみんながあまり興味を持たない事柄であるという実感だけは残りました。

さて、尊厳とは、辞書によれば「とうとくおごそかなこと。気高く犯しがたいこと。また、そのさま」だと書いてあります。日本国憲法第 13 条にある「個人の尊重」がそれにあたるそうです。

とはいえ日常生活において毎日「私の尊厳を守るためにこれをするのだ」とか考えて行動するひと、たぶんほとんどいないと思います。尊厳というものは、普段当たり前にしている何か失われそうなときに初めて浮かび上がってくる概念だと思います。

災害や戦争が起これば、そこで暮らすこと自体が人の尊厳を損なう場面になりかねません。あるいはひとが社会的な少数派や弱者といった立場に回ったと感じた場合に作動する概念かもしれません。「私を軽く扱わないでほしい」という願いの籠った言葉と言ったらいいでしょうか。尊厳の侵害などという事は非日常であるし、そうあってほしい。

私たち医療の現場では、一時的にしろ身体や意思表示の自由を制限されている人が多くいて、つまりそれを患者さんというのですが、その人たちが個人として尊重されているかどうかは重要です。

患者さんの意に沿わないことを強制していないか、本人がいいと言っているからそのままでもいいのか、といった葛藤が常に付きまといます。最近是一般に、そういった独りよがりな判断で患者さんを苦しませることの無いように、医者ひとりの独断でなく、多職種で対等に意見を出し合うことが倫理的にみてより良い判断に近づくと考えられています。

少なくとも、自分がそのようにされたら嫌なことは他人にもしない、という程度の観点からでも、他者の尊厳を保つことにつながるのではないかと思います。さらには、自分が考える正しさを他人に強制しないことも、大事にしたいところです。

昨今、世間が、世界がだんだんと世知辛く感じられてくる中で、基本姿勢みたいなものを確認しておきたかったのです。「尊厳死」のような特別な言葉で武装しなくても、人生の終わりが

満足な気持ちで迎えられたらいいですね。それは即、今日のいまを満ち足りた時間にする
こと、まったく同じだと思います。